

投稿

隕石の伝説・伝承

臼井 正 (京都学園大学)

1. はじめに

筆者はかつて、「凶兆としての流星」[1]という題で投稿したことがあった。そこでは、流星を不吉なものとする伝承が世界各地にある一方、現在一般に言われる「流れ星に願いごと」という言い伝えについては、時代的にはそれほど遡らない可能性を示した。今回は、その続編で、隕石に関する伝説・伝承を見ていきたい。

2. 古代オリエント

世界最古の物語とされる古代メソポタミアの『ギルガメシュ叙事詩』にも、隕石を思わせるものが登場する。ギルガメシュは紀元前2600年頃に実在したシュメール人の王とされるが、彼に関する伝説がまとめられて古代バビロニア王国時代(紀元前2000-1600年)に『ギルガメシュ叙事詩』が成立した。ギルガメシュはある夜に見た夢について、母に夢解きをしてもらおうと、こう語る。

わが母よ、私は夜のあいだに、
喜びをおぼえて貴人たちのあいだを歩きまわった。天には星々が姿を見せていた。アヌの〔精〕髓が私にむかって降りてきた。それを持ち上げようとしたが、私には重すぎた。
動かそうとしたが、私には動かせなかった。
…[2]

文中の「アヌの〔精〕髓」のアヌは、シュメール人の天の神の名前で、訳注で「アヌと天は同義であるから、天の星を指すと思われる。」としている。そして、この夢はギルガメシュの母によって、ギルガメシュのもとに、叙事詩の中で重要な役割を果たすことになる

エンキドゥがやって来るしるしと解釈された。

これは伝説中のさらに夢の中の話なので、実際の出来事がもともになっているかどうかは疑わしいが、既に紀元前2000年紀に石が空から落ちてくる可能性が考えられていたことが分かって興味深い。

『旧約聖書』「ヨシュア記」10.11には、モーゼの後継者ヨシュアが約束の地エルサレムを手に入れようとしていたとき、イスラエルの先住民の連合軍が、

イスラエルの前から敗走し、ベト・ホロンの下り坂にさしかかったとき、主は天から大石を降らせた。それはアゼカまで続いたので、雹(ひょう)に打たれて死んだものはイスラエルの人々が剣で殺した者よりも多かった。(新共同訳)

とある。主が太陽の動きを止めさせてヨシュアに戦いを続けさせた有名な話は、この直後に出てくる。

古代エジプトのパピルス文学に「難破した船乗りの話」という物語がある。第12～13王朝(前2000～1700年)に書かれたと考えられている。この話では、主人公の乗った船が紅海で難破して一人だけ、とある島にうち上げられると、そこには言葉を話す蛇が一匹だけいて、その蛇が語るには、

われわれは全部で65匹だった。…さて、一つの星が天から落ちて、まわりに燃えついた。これはわたしが彼らと一しょにいないときのことだった。そのため彼らはみな焼けてしまった。それが一かたまりの灰になっているのを見たときには、わたしは氣を失って死ぬかと思ったものだ。

そして「もしおまえが強い人間ならば、心を

おさえなさい。」[3]と励ました。やがて、この蛇が予言したとおり船がやってきて、主人公は蛇からもらった高価なおみやげを持って、無事にエジプトに帰った。

聖書や古代エジプトで、星の落下によって人間や生物が死ぬことがありうるとされ、物語に採り入れられたのは興味深い。これらの話は空想なのか、それとも遠い過去の隕石落下の記憶が反映されているのだろうか。

3. 古代ギリシア

古代ギリシアでは、ペルシア戦争に勝った後、アテナイとスパルタが紀元前 431 年からペロポネソス戦争を戦っていたが、アテナイは紀元前 405 年、ダーダネルス海峡北岸のアイゴスポタモイの海戦でスパルタに敗れ、それが決定打となって翌年に降伏した。

プルタルコス『英雄伝』「リュサンドロス伝」によると、この海戦のスパルタ方の大将だったリュサンドロスが出港するときには、カストルとポルックスの兄弟（ディオスクロイ）が星となって、船の舵の両側の上に光を放ち、

又或る人は、石が降ってきたことがこの敗北の前兆になったと云っている。多くの人の意見によると非常に大きな石が天からアイゴスポタモイに降って来たそうである。今でもそれが人々に示されて、ケルソネーソスの住民はこれを崇拝している。

[4]

ただ、隕石が落下したのは紀元前 467 年のことで、海戦の 50 年以上も前のことだから、前兆といっても気の長い話である。この隕石が、スパルタの勝利の前兆でなく、アテナイの「敗北の前兆」とされているのは、隕石の落下が悪いイメージでとらえられていることを示している。一方、地元住民にとっては、隕石が崇拝の対象となっている。

自然哲学者のアナクサゴラスは、この隕石

が太陽から落下することを予言したという、驚くべき話も残されている。さらに彼は、太陽は灼熱した石で月は土であると主張したこと从不敬罪で訴えられ、当時のアテネの指導者ペリクレスの尽力で牢獄から逃れて、アテネから追放された。

一方、アリストテレスは、月より上の世界はエーテル（第 5 元素）からなる完全な世界で、有為転変があるのは月下界のみだと考えていた。そこで、流星・隕石・彗星は『気象論』の中で取り上げられ、アイゴスポタモイの石は「大風に吹きあげられて昼間地面に落ちたが、これはちょうど西から彗星の現われたときであった」[5]として、隕石は彗星が起こした風で地面から飛び上がったもの、とした。この説が、アリストテレスの他の学説と同様、2000 年にわたって生き続けることになる。

古代ギリシアでは他にも、世界の七不思議に数えられるエフェソスのアルテミス神殿の像や、デルフォイのオンファロス（世界の中心に置かれた臍（へそ）石）など、天から降ってきたと伝えられるものが多くあった。

4. 古代ローマ

紀元前 205 年、共和制ローマはカルタゴ（現在のチュニジアにあった都市）の名将ハンニバルに攻め込まれて苦境に立っていた。流星群の出現を見てローマの神官が「シビュラの予言書」をひもとくと、ペッシヌス（現在のトルコ）の神殿にある隕石をローマに運ばない限り、ハンニバルには勝てないだろう、というお告げを得た。ペッシヌスを治めていた王は、ローマの使節団を迎えたときに地震が起きたので、隕石を渡すことに同意して、隕石はローマに運ばれた。隕石の加護を受けたローマはハンニバルに打ち勝ち、パラティヌスの丘に隕石を祭る神殿を建てたという。

その後、帝国となったローマは、1~2 世紀

の五賢帝の時代が過ぎると、3世紀には軍人皇帝時代を迎えるが、その過渡期にあたるのが西暦193年にローマ皇帝となって、セウエルス朝を開いたセプティミウス・セウエルスである。彼はまだ帝位に着く前に最初の妻を失ったので再婚を望んだが、ある女性がホロスコープで王と結婚すると予言されているのを知って、その女性ユリア・ドムナと結婚した。彼女はシリアのエメサにある神官の家系で、そこでは太陽神パールのご神体として、隕石とされる円錐形の黒石が崇められていた。

その後、セプティミウス・セウエルスの子孫が皇位を継いでいくが、その中に14才でローマ皇帝となったエラガバルスがいた。彼はもとはパール神の神官で、皇帝になるとローマに神聖な黒石を運ばせた。この黒石は、当時のコインにも刻まれている(図1)。エラガバルスは、放蕩生活を続けたので、即位して4年目には殺され、後に黒石はエメサに戻されたという(3節と4節は、おもに文献[6]によった)。



図1 皇帝エラガバルスのコイン
表(左)に肖像、裏(右)に4頭立ての馬車に乗せられた、エメサの黒石が刻まれている。CNG Coins[7]

5. カーバとエンシスヘイム

最も有名な隕石(とされる石)はメッカのカーバ神殿の隕石だろう。カーバという言葉は立方体を意味するが、実際は直方体で、隕

石とされる黒い石はその東北の隅にはめこまれている。

カーバ神殿には、マホメット(ムハンマド)が生れるずっと前から、多数の偶像があり、黒石はその内の1つとして崇拝されていた。そして、マホメットによって偶像が破壊されていった中で、黒石だけは破壊をまぬがれたという。これまで見たように、天から降ってきたとされる石を崇拝するのは、古代ギリシア・ローマ時代から盛んだったので、マホメット以前のアラブ人も、そうした影響を受けていた可能性が考えられる。

1492年11月7日、当時、ドイツ領(現在のフランス東部)だったアルザスのエンシスヘイムに150kgもの隕石が落ちた。この時、民衆はお守りにするために隕石を削り取って行ったという。のちに神聖ローマ皇帝となるマクシミリアンがそこを通りかかり、これはフランスとの戦いに勝利する前兆であるとして、教会で保存するように命じた。このようにドイツでは吉兆とされたが、あるイタリア人は、この隕石はフランス王シャルル8世のイタリア侵入や、コロンブスが翌年に持ち帰った梅毒の流行などの前兆だった、と悪い意味に解釈している。

古代より空から落ちてきた石は特別な形をしていると信じられ、現在、隕石に分類される石以外にも、天からの石とされていた。ルネサンスの博物学者ゲスナーの書には、空から落ちてきた石としてウニやベレムナイトの化石や原始時代の石器などが描かれ、月食の時に空から降ってきたと信じられた三角製の石は、実はサメの化石だったという[8]。

6. 世界の伝承

隕石に対する崇拝は世界各地にみられる。現在のテキサス州に住んでいたネイティブ・アメリカンのポーニー族は、病気を治す力が

あると信じて隕石を崇拜し、隕石のある場所に巡礼を行っていた。その話を聞いた西洋人は、それがプラチナだと思って運び去ったが、鉄だと分かって博物館に売ってしまった[9]。

ユーラシア大陸の北部に住むアルタイ系民族では、天から降ってきたと信じられている一種の石を、豊穡を祈願して拝んできた。「特にバラガンスク市近くには極めて有名な《天くだりの石》が存在する。ブリヤート人は早魃が長く続いた時に、よみがえりの雨を乞うてその石に供物をする。石の色は白く、民間で信じられているところによれば、初め高い山の上に落下し、後にそこから現在の場所に移ってきたのである。」[10]

一方で、隕石が恐れられる場合があった。オーストラリアの先住民族のアボリジニは、19世紀に落下した隕石を大変恐れて、地中に隠した。なぜなら、もし太陽が隕石を見たら彼らを殺すために、もっと多くの隕石が振り落とされるだろう、と考えたためだった。

インドのパンジャブ州で同じく19世紀に落ちた隕石について、王は不吉だからよそに運ぶ許可をイギリス人に求めたが、バラモン（ヒンドゥー教の祭司階級）は隕石を拝むために寺院を建てたがった、というように、同じ民族でも受け止め方が違っている例もある。

アメリカのカンザス州では、農民たちが隕石と知りながら、雨水をためる桶のふたや、干し草の重しや、豚小屋の穴をふさぐために使っていたように、隕石に対して特別な感情を抱かずに、単なる素材としてしか見なかったケースもあった（以上、[11]によった）。

オーストラリアの先住民であるアボリジニは、アリススプリングスの近くにある隕石口は、彼らの先祖に当たる天上の女性が天の川を作ろうとして踊っていたとき、誤って彼女の赤ん坊を空から落としてしまって地上に出来た穴で、取り乱した母親と父親は、明けの明星と宵の明星になって今でも赤ん坊を探し

ているのだと伝えている[12]。これは、隕石口を天からの落下物に関連づけていて、なかなか的を射ている伝説といえる。

7. 東洋

三国志の英雄・諸葛亮（孔明）が五丈原で魏の軍勢と向き合っていたときのことを、正史『三国志』は、別の書物を引用して、次のように述べている。

『晋春秋』にいう。赤くてとがった星が東北から西南に流れて、諸葛亮の陣営に落ち、三たび落ちて二度は空に戻った[が、三度目は落ちたままだった]。落ちたときは大きく、戻るときには小さくなっていた。にわかには諸葛亮はなくなった[13]。

正史『三国志』は、いわゆる魏志倭人伝も載っている西晋（3世紀）の正式な歴史書で、『三国志演義』の方は、正史をもとに14世紀に成立したフィクションだが、こちらにも同様の隕石の話が出てくる。ただし、『三国志演義』ではライバルである魏の将軍・司馬仲達が見て「孔明が死んだ」と言って喜ぶ話になっている。その後、司馬仲達は蜀の軍勢を攻めるが、軍中に孔明を見つけ、それが木像なのにも気づかず敗走し、「死せる孔明、生ける仲達を走らす」ことになった。

紀元前1世紀の司馬遷の『史記』「天官書」は星座や惑星とそれらに関する占いをまとめたもので、その中の天狗星（てんこうせい）の所には、「大きな流星のようで音がし、おちてきて地に止まると、狗（こいぬ）のようにみえる」、「千里の内に敗軍があったり将が殺されたりする」[14]という記述がある。孔明が死んだときに都合よく隕石が落ちると思えないから、『史記』「天官書」にもとづいたフィクションだろう。

同じく、『史記』「天官書」には、「星が落ちて地にゆきつくと石となる。黄河・済水の間の地方には時おりこうした隕石がある。」[14]

という記述もあるが、これに対する占いは書かれていない。ここでは、アナクサゴラスのように（3 節参照）「星＝石」ではなく、「星→石」のように、星と石はあくまでも別物と考えられていたことが、中国らしい。ちなみに、正岡子規の俳句に、「星落ちて石となる夜の寒さ哉（かな）」がある。

一方、江戸時代の百科事典『和漢三才図会』が引用する『五雑組』では、

星が地におちて石となったのをみると、寸尺ばかりの大きさにしか過ぎない。どうして大きな星がにわかに縮まって地上に達するというようなことがあり得ようか。

として、

諸葛武侯（孔明の諡（おくりな）、祖逖（そてき：晋代の武将）、馬燧（ばすい：唐代の武将）、武元衡（ぶげんこう：唐代の政治家）などの人々は、いずれもその死にあたって星が落ちたという。しかし、古（いにしえ）より今に及ぶまで、おちた星の数は知れぬぐらい多いのに、天上に象（ものかたち）を仮託した星が減って少なくなったとも思えない。[15]

と、冷静な意見を述べている。

奈良時代の恵美押勝（えみのおしかつ：もとの名は藤原仲麻呂）は、叔母にあたる光明皇后（聖武天皇の皇后）の信認が厚く、皇族以外で初めて太政大臣まで出世した。しかし、光明皇后の崩御の後、孝謙上皇（聖武天皇と光明皇后の娘）の病を治した道鏡（どうきょう）に押されて、反乱を起したが敗れて斬首されてしまう。『続日本紀』には、彼が殺された夜の出来事として

この夜、星ありて、押勝の臥す屋の上におつ。その大きさかめの如し。

とある。これは孔明の場合と同じく創作記事で、押勝の死が天の意志である、ということを示唆するために、隕石が使われた、と見る

べきだろう。

実際の隕石の例としては、貞観二（861）年に福岡県直方（のうがた）市の須賀神社の境内に落下したと伝えられる小さな隕石が、宮司の家に家宝として保存されてきたのが隕石だと確認されている。これは現存する隕石のうち落下の記録がある最も古いもので、2 番目が上述のエンシスヘイムの隕石（5 節参照）だが、世の東西を問わず、どちらも宗教的な意味を持って保存されていたのが注目される。

その他、日本の各地で、星が落ちたところに神社が作られたとか、ご神体が隕石である、といった伝承がある[16]。全てが本当だとはあまり思えないが、日本でも隕石を聖なるものだと考えていたことは確かである。

8. 隕鉄

隕石の中でも、鉄が主成分の隕鉄は、鉄鋳石による製鉄術が知られる前から、使われていた。古代エジプトのツタンカーメン王の墓から発見された鉄剣もニッケルが多いことから隕鉄から取られた鉄で作られたと考えられている。また、鉄を表すシュメール語は「天の金属」を意味する、という説を、ネット等で見かけるが、「アッカド語、シュメール語、エジプト語、ヒッタイト語の鉄の語源について、確立した説はない」[17]という。また、古代エジプト語では、「天の金属」という言葉が鉄の意味で、紀元前 14 世紀から使われるものの、これはエジプトで隕鉄が使われるようになってから 2000 年も後になってからのことで、語源にはなりえない、という[17]。

また、中国でも、殷代の「鉄援銅戈」と「鉄刃銅鉞」（紀元前 13 世紀～前 12 世紀）などが隕鉄で作られていることが分かっている。

隕鉄からとれる鉄はあまりにも希少だったので実用性には乏しかったが、隕鉄が鉄の有

用性に気づかせて、鉄鉱石を使った製鉄技術の確立につながったという説がある。ただ、鉄鉱石から鉄を精錬するには、高い技術が必要なため、直接的な関連はない、という説もあるようだ[11]。

征服者コルテスがアステカ人の首長たちに彼らのナイフをどこから手に入れたかを尋ねたとき、彼らはただ空を指さした。ヨーロッパ人がやってくるまで、アメリカでは鉄鉱石を溶解することについては何も知らず、隕鉄から取った鉄のみを使い、それを金よりも高く評価していたという[18]。

グリーンランドのイヌイットも隕鉄の鉄からナイフを作っていて、その範囲は隕鉄のある場所から 2000km にも及ぶという。1894年にはそれを知った探検隊が現地のガイドを連れて、合計 40 トンもの隕鉄を発見して、ニューヨークに持ち帰っている。

インドのジャハンギル帝(タージ・マハルを作らせたシャー・ジャハンの父親)も魔術的な力を持つとされる、隕鉄から作った剣を持っていた[9]。

日本でも、明治時代になって榎本武揚が「流星刀」を作らせている。榎本武揚は幕末には徳川方として函館の五稜郭にたてこもったが、明治維新後に許されて政府高官として活躍した。彼が駐露公使としてロシアに赴任したときに、隕鉄から作られた星鉄刀を見たことから、自分も作ってみたいと思うようになった。そこで、帰国後の明治 23 (1890) 年に富山県で発見された隕鉄を購入して、「流星刀」5振りを作り(図 2)、1 振りを大正天皇(当時は皇太子)に献上し、明治 31 (1898) 年には隕石の定量分析などをまとめた「流星刀記事」を著している[19]。

モロッコには 14 世紀ころに落ちた隕鉄にまつわる伝説がある。ある時、天から金の塊が落ちてきたが、人々は所有権を争ったので、神は金を銀に変えた。それでも人々は争いを

やめなかったので、神が銀を鉄に変えたところ、人々は興味を失い、モスクの前に置かれたままになったという[11]。ちょうど、「金の斧、銀の斧」の逆のような話である。



図 2 榎本武揚の流星刀 富山市天文台提供

9. 隕石の天文学史[8]

古代から近世に到るまで、民衆は隕石は天から降ってきたと素直に考えてきた一方で、天文学者は 19 世紀初頭までそうした考えを受け入れなかった。隕石が落下しても、アリストテレスに従って、雷によって打たれた地上の石だとしてたり、民衆の錯覚だとして注意を払わなかった。1794年にドイツの物理学者クラドニが、隕石は宇宙からやって来るといふ説を発表したが、なかなか受け入れられなかった。

1807年にアメリカに落ちた隕石が天体起源だという説を 2 人の天文学者が発表したときに、当時のアメリカ大統領ジェファーソンがそれを疑って「石が天から落ちてくることを信じるよりは、2 人の天文学者がうそをついていることを信じるほうが簡単だ。」と言ったと伝えられるが、これは後から創作された話らしい。

本格的な研究が始まったのは、1800 年前後に隕石の落下が目撃され、隕石の成分が分析されてからである。地表に残されたクレーターが大隕石の衝突によるものだとする説が出されたのは、さらに遅れて 20 世紀に入ってからで、論争に決着がつけられたのは 1950 年代のことであった。

10. おわりに

隕石は流星と同じく不吉なものとして恐れられることもあったが、崇拜されることの方が多かった。宗教学者のエリアーデは、「隕石は天上の聖性を充填されて地上に墮ちる、つまり天空を表現しているわけである。このことは非常に多くの隕石が崇拜されたり、神と同定された理由を暗示するであろう。信仰者は隕石のうちに「原型」、神の直接的な発現をみたのである」[18]と述べている。このあたりは、流星が不吉なものとしたのと対称的なのが興味深い。

ここに挙げた天からの石が全て本物の隕石があったかどうかは疑問だが、崇拜する人々にとっては真偽よりも、天や神とのつながりを感じたいという欲求の方が重要だったのだろう。

文 献

- [1] 臼井正 (2006) 「凶兆としての流星」, 天文教育, 18(3) : pp.26-37.
- [2] 杉勇ほか訳 (1978) 『古代オリエント集』, 筑摩書房.
- [3] 矢島文夫編 (1974) 『古代エジプトの物語』, 社会思想社.
- [4] プルターク 河野与一訳 (1954) 『プルターク英雄伝 6』, 岩波書店.
- [5] アリストテレス 泉治典ほか訳 (1969) 『アリストテレス全集 5』, 岩波書店.
- [6] McBeath, A., and Gheorghie, A. D., (2005) ‘Meteor Beliefs Project: Meteorite worship in the ancient Greek and Roman worlds’, WGN, the Journal of the IMO, 33:5.
- [7] <http://www.engcoins.com/Coin.aspx?CoinID=104010>
- [8] Zanda, B. and Rotaru, M. ed, (2001) “Meteorites”, Cambridge Uni. Press.
- [9] Schaefer, B. E. (1998) ‘*Meteors that Change the World*’, Sky and Telescope, December, pp.68-75.
- [10] ウノ・ハルヴァ 田中克彦訳 (1971) 『シャマニズム』, 三省堂.
- [11] Burke, J. G., (1986) “Cosmic debris”, University of California Press.
- [12] Haynes, R. D. (2000) ‘*Astronomy and the Dreaming*’, Selin ed., “Astronomy across cultures”, Kluwer Academic Publishers, pp.53-90.
- [13] 陳寿 井波律子訳 (1993) 『正史 三国志 5 蜀書』, 筑摩書房.
- [14] 司馬遷 野口定男ほか訳 (1968) 『史記 上』, 平凡社.
- [15] 寺島良安 島田勇雄訳 (1985) 『和漢三才図会 1』, 平凡社.
- [16] 天文民俗学のページ http://astro.ysc.go.jp/izumo/sin_nihon.html
- [17] Bjorkman, J. K., ‘*Meteors and meteorites in the ancient near East*’, Meteoritics, 8 : 2, pp.91-132.
- [18] エリアーデ 大室幹雄訳 (1973) 『鍛冶師と錬金術師』, せりか書房.
- [19] 榎本隆充 (2003) 「榎本武揚の流星刀製作と「流星刀記事」/シベリア横断旅行と『シベリア日記』」, 地学雑誌, 112 : 3 pp. 453-457.

臼井 正

【付記】なぜ、正編[1]から4年もブランクがあったかという、これが埋め草だからです。この4年間は、原稿が順調に集まっていたが、幸か不幸か今回、この原稿が日の目を見ることになりました。というわけで、みなさま原稿をお寄せください、ということをお願い委員の一人としてお願い申し上げます。